

〔日本書紀齊明十六〕四年十月甲子、幸紀溫湯、天皇憶皇孫建王、愴爾悲泣、乃口號曰中、瀨灘能、于之之、哀能能、矩娜利、于那俱、娜梨于、之廬母、俱例尼、飯岐底、舸庚舸、武三、其

〔萬葉集二挽歌〕天皇武崩之後、八年九月九日、奉為御齋會之夜、夢裏習賜御歌一首中

神風乃、伊勢能、國者與、津藻毛、靡足波、爾鹽氣、能味香、乎禮流、國爾味、凝文爾、乏寸高、照日之、御子、

〔古今和歌集十七〕題しらす

よみびとしらす

わたつ海のおきつ鹽あひにうかぶ淡の消ぬ物からよる方もなし

〔吾妻鏡三十八〕寛元五年寶治三月十一日甲子、由比濱潮變色、赤而如血、諸人群集見之云云、五

月廿九日辛巳、三浦五郎左衛門尉參左親衛御方申云、去十一日、陸奥國津輕海邊、大魚流寄、其形偏

如死人、先日由比海水赤色事、若此魚死故歟、隨而同比、奥州海浦波濤、赤而如紅云云下

〔倭訓栞前編十一〕しほのみちひ 潮の満乾也、天地の壽數十二萬九千六百年、其息晝夜に、二呼二

吸也、引息には元氣升り、地沈むによりて、海水溢る、出る息には地もとの如く浮によりて、汐ひる

といへり、

〔秉燭或問珍三〕潮之說

或問潮のさし引は一分を増す、一分を減せず、いか成道理にや、又潮の満來る事皆東の方よりさす也、委敷其說を聞ん、

對曰潮の說、古來紛々として一ならず、案するに、潮は天地の呼吸の氣息なり、呼吸の氣息とい

ふは、人の日夜の呼吸のごとし、天地の間の自然の呼吸なり、中凡天地の壽數は一元の氣に

して、十二萬九千六百年也、子の會に天闢、亥の會に天地塞るの間也、故に其息も緩くして一晝

夜に二呼二吸なり、其二呼二吸は是氣の升降也、地は水に浮び、水は元氣と升降す元氣升る時